

ドラグーン

ながたかずひさ

その国は、戦争に負けた。

大きな戦争だった。

たくさんの人が死に、たくさんのものが傷ついた。

山も、海も、畑も、街も、人のこころも。

占領軍が来た。

彼らは予想に反して、とても友好的だった。威圧的では、なかった。

そこで人々は初めて、どれほど強大な敵に無謀にも立ち向かっていったかを、  
思い知る。

その国には珍しかった軍用車両、上級将校しか乗れなかった「クルマ」を、  
ごく普通の兵隊が乗り回していた。それも、街中至る所で。

技術力が違う。工業力が違う。国力が、違う。

その国の人々は、変わり身の早さが民族的特徴だった。そして思ったよりも合理的だった。あれほど傲岸不遜に背伸びをしていたのに、負けたとなるや卑屈なまでに腰を折り、頭を下げた。

それは決して悪いことではない。

自らが足りぬのなら、補うべきである。

自らが幼いのなら、成長するべきである。

何もない焼け野原でお腹を空かせた子供達は、その兵隊へと、クルマへと群がった。そうすれば、何かが貰えたからである。

「おや？ あの子は何も欲しがらないな」

「そうだな、どうしてだろう？」

その男の子は、うっとりとした目つきで、彼らの乗っている無骨な鉄の塊を、見つめたまま動かない。

「やあ！ 君にも何かあげようか？」

子供好きで知られたその兵隊が声をかける。チョコレートを片手に。もちろん、言葉は通じない。

「……」

その子は黙って首を振り、熱心にその鉄の塊を見つづける。兵隊はようやく、その子の意図することを知る。

「坊や、クルマが珍しいのかい？」

その子はちらり、と兵隊を見ると、ニツコリ笑った。

それならば……手招きしてやる。周りの兵隊三人は少し、驚く。

「おい、そんなことして問題にならないか？」

「大丈夫さ。クルマ好きに、悪い子はいない」

男の子は逡巡したが、クルマの魔力には勝てなかったようだ。意を決し、これ以上ないような硬い顔をしてクルマに飛び乗る。彼にとつては、見知らぬ街へ

行くよりも決意の居ることなのだろう。

そんな小さく、だが大きな決意を微笑ましく思いながら、兵隊は幼い頃、父親の運転するトラックに乗って牧場を駆け回った自分を思い出す。

クルマは、走り出す。

いなや彼の硬い顔は崩れ、これ以上ない笑顔に変わる。

屋根もフロントガラスもない軍用車両、彼の顔にはこれでもかというほどの風が当たる。

だがその強風でさえ心地よい。

だが髪の毛の乱れさえ気持ちいい。

スピードを上げ、なんの障害もない焼け野原を、右へ、また左へと駆け抜ける。

少年は英雄気分になる。

そしてハンドルを握りギアを操作するドライバーは、魔法使い。

小さな手業で、この鉄の塊を思うまま操る。

少年は憧れる。

そして、憧れに憧れていた「クルマ」というものが、思った通り……

いや、思っていたよりはるかに素敵なものだという事実には、酔いしれる。

めくるめく大冒険はわずか十分ほどで終わった。

地区を一回りして同じ場所に帰ってきた兵隊は少年を下ろし、手を振って去っていく。

だが少年にとってその十分は、運命の十分だった。

オレンジの街、夕陽に誓う。

いつか、じぶんのくるまで、すぎなだけ、はしる。

そして、強く想う夢は、必ず叶う。

「なんやて!? 『ワイバーン』が出る!？」

「嘘だよ! どうしてこんなところへ!？」

「嘘じゃない! こんなことで嘘を言つて、何になるつていうんだ! これを見  
てみる!」

「……合同通信社の配信ニュース……なに、『世界最大の自動車メーカー、GC  
社は、我が国の第二回『グラン・プリ』に、自社のレーシングカー『ワイバー  
ン』を参戦させることにした。なお、供給を受けるチームはザイゼン・レーシン  
グ……』なに! ザイゼンだつて!？」

「なんやそれ!? ワークスが乗り込んでくるんならともかく、買ったんかいな!」

「何を考えているんだ! 『グラン・プリ』は我が国の自動車の発展のために開かれるレースだぞ! 金に明かせて海外のレーシングカーを買ってそれで出場して、一体何の意味があるっていうんだ!」

「でも……『ワイバーン』か……」

「……」

その名がもう一度出た瞬間、興奮に満ちていた場の雰囲気、急速に醒めていく。

それは、彼らにとって、あまりにも厳しい宣告だった。

その国は戦争の傷跡から着実に復興した。

もともと持っていた勤勉さ実直さという国民的な性質に加え、高い教育水準、



多い人口、そして何より、「自分たちは劣っている」という謙虚さ。どん欲に過ぎるほどのあらゆるものへの吸収意欲で、急速に工業生産水準を引き上げる。

すでに鉄鋼、造船、工作機械などの分野では、戦前をはるかに上回る規模で生産が進み、世界的に見ても屈指の実力を誇った。右肩上がりの成長はとどまるところを知らない。

そして、時の通商産業を司る大臣は、気骨ある慧眼の持ち主だった。

これからは、クルマだ。

人間を、一日にして千キロ移動させ、一度に千キロの荷物を運ばせる魔法の靴、クルマが人々の生活を変えていく。戦争で出遅れた我々は、この産業を何としても立ち上げねばならぬ。

情報通で海外経験の長い大臣は、そのために洒落た方法を強力に推進する。

『グラン・プリ』 Ⅱ 偉大なる賞典。自動車レースだ。

競争はあらゆる技術、あらゆる経済の原点である。競争が急速な技術の発展をもたらす。

より速く、より強く。それを、より安く、よりたくさん。

そして自動車レースという最高の娯楽は、クルマに興味を持つ人を増やす。買いたい、欲しいと思う人を増やす。それがまた、クルマという産業を振興させる……

勃興しはじめていたクルマ屋達は、飛びついた。

もともと技術屋は、職人気質が多い。

「アイツのクルマより、オレのクルマが速い」

そんな単純なものさしに、夢中になった。

戦前からクルマを造っていた大メーカーが、本気になって復活を画策する。

工作機械や電気機器を造っていたような小さなメーカーが、一山を狙って海外の

クルマのコピーを造る。今までクルマなんて乗ったこともないような町工場のおヤジが、見よう見まねと自らの創意工夫だけを頼りに、不格好な手作りのクルマを、造り上げる。

百花繚乱。クルマを取り巻く状況は、一気に盛り上がる。

紆余曲折を経て開かれた第一回『グラン・プリ』の優勝チームは、国内五位のメーカー、ナイト自動車だった。ナイトのクルマは、少々高価で華麗に過ぎ、実用性が低い嫌いはあったが、低いレベルのなかでも懸命な技術者魂を感じさせる、実に「熱い」クルマだった。

優勝車の名は、『ドラグーン』。

『竜騎兵』。戦いの主力である重装歩兵と、偵察・連絡などを目的とする軽装騎兵の中間に位置し、その機動力と高い戦闘能力で神出鬼没獅子奮迅の活躍をする、古の戦いの花形である。

その名を冠されたそのクルマは、当時珍しい「スポーツ・セダン」というジャンルジャンルのクルマだった。セダン、といえば人を乗せて走るもの、丸々と肥え太り客室容積を極大化させたようなデザインがほとんどの国産車の中で、ドラグーンは際だってスマートだった。

エンジンは、当時高級車専用以外の何物でもない二千cc。そしてその大排気量の生み出す、圧倒的なパワー。

美と力を兼ね備えた、当代随一の人気車である。

もちろん、クルマはおいそれと買えるものではない。

おいそれと買えるような人は、当然、よりスマートで性能もいい、外車を買った。人気車といっても、セールス上の話ではない。あくまでも人気投票するならば、だ。

だが、本当のクルマ好き達は、「いつかは、自分たちの国で創られた、ドラ

グーンのようなクルマが欲しい」と思っていた。

その憧れのクルマが、並み居る大メーカー達の不格好なセダンを薙ぎ払い、ブツギリで優勝したのだから興奮もする、盛り上がりもする。

ナイトの評価は更に高まり、気をよくした経営陣は、技術陣にできうる限りの贅沢をさせてやる。

翌年の第二回『グラン・プリ』に、ナイトはドラグーンに人々があつと驚くようなチューニングを施した。

エンジンの換装である。

ボディをフロントガラス前でぶった切つて伸ばす。そこに上級車『ファランクス』用の直列6気筒を二千ccにスケールダウンし、超高回転型レーシング・チューンを施したスペシャル・エンジンを詰め込んだ。

『グラン・プリ』の三ヶ月も前にできあがったプロトタイプは、お披露目の後、

早速自社テストコースでの過酷なテスト・ランに入った。

周囲のメーカーは恐怖した。あれほど高い性能を誇るドラグーンに、あそこまでされては、果たして勝機があるのか、と。

逆に人々は、またもドラグーンが並み居る強豪をバツタバツタと切り捨てる痛快無比のレース展開を想像し、期待に胸を膨らませた。

それが、この発表である。

GCの『ワイバーン』は、強かった。

ドラグーンの「強さ」などとは、レベルが何段も違う。

それは、V型8気筒をミッドシップに積む、設計段階からレースで勝つことだけを目的に作られた、生粋のレーシングカー。そして、世界各地の自動車レースで、無敵の進撃。

そのぐらいの情報は、ここにいるナイトの若い技術者達も、知っている。当時創刊されたばかりの自動車専門誌に、毎月のようにワイバーンが勝つ様が掲載されていた。自動車先進各国で開催される、大小様々な各レースで、勝って、勝って、勝ちまくっている。

それが、来る。

のんびり田舎で楽しんでる草野球リーグに、プロ野球球団がなぐり込みをかけるようなものである。いや、レベルの差はもつと酷いかもしれない。

もう一つの問題は、それを買ったのがこのレースからレースシーンに復帰してきた、「ザイゼン・レーシング」だということだった。

戦前から活動していた、この国随一の名門レース屋。メーカーが直接参戦するワークス・チームとは違う、レースに勝つために存在する集団である。だから、勝つ、勝てるクルマであるならば外車でも、買う。

特に名門の復帰第一戦。スポンサーや、これからのことを考えても、どんな手段を使つてでも、勝ちにゆく。例えどんな非難を浴びようとも、レースの世界では結果が全てである。

それは道義的にはともかく、レギュレーション的には何の問題も、なかった。そして。

ザイゼン・レーシングがワイバーンを走らせるということは、ドライバーは当然、監督兼オーナーの息子であり、現在自他共に認める国内最速、「天才」ザイゼンである、ということだ。

彼は、第一回『グラン・プリ』で、ドラグーンを優勝に導いている。

最強の敵の出現、そしてこちらの最大の切り札である最速ドライバーの損失。二つの凶報が、同時に来たのである。



「失ったものを悔やんでも、新しい敵の出現に無闇に恐怖していても、始まらないぞ！ やれることから一つずつ、自分たちの強みを増やしていくんだ！」

レース総監督、ガモウは、力強く若い技術者達にハツパをかけた。

だが時は残酷である。

効果的な大逆転の策は見つからないまま、日は過ぎて、いった。

---

第二回『グラン・プリ』、予選当日。

わかつては、いたことだった。

そして、雑誌の写真から寸法を割り出したりして、モデラー達を焚き付け、実物大モデルを木や紙で、でつちあげさせたりした。それで、だいたいを、掴ん

だつもり、だつた。

だが、聞くと見るとでは、大違いだつた。

低い。長い。幅広い。

そして、流れるような、ボディライン。

カッコよかつた。うっとりするほど、カッコよかつた。

それが敵のクルマであるとか、戦争で負けたあの国のクルマであるとか、そんなことは頭の中から吹っ飛んだ。一人のクルマ好きの少年に戻って、若いメカニック達は恍惚の表情で、そのクルマを見つめた。

ボディカラーは、黒。複雑にうねる曲線と曲面のボディラインに、日の光が艶々と反射する。

禍々しいほどの迫力。そして、吸い込まれるような美しさ。

ワイバーンは、その名の通り、翼を広げた翼竜さながらに、レースフィードに颯爽と舞い降りた。

周りの全てのクルマは完全に引き立て役だった。マッチ箱。オモチャ。折り紙細工。なんと評されても、何の反論もできなかつた。「流麗だ」と讃えられていたドラグーンのボディでさえ、サラブレッドとして生まれてきたワイバーンの前では、少しスタイルのいいロバに過ぎない。目くそ鼻くそ、だった。

幼稚といつてもいい青・白・赤のトリコロール……ナイト自動車のイメージカラー……に彩られた、自らのクルマに恥じ入りそうになる。

ザイゼン・レーシングのメカニック達が、自分たちの手柄でもないのに誇らしげに、前後のカウルを開けっぴろげにして整備を始める。

「見たいのなら、見ればいい」。余裕、綽々。

そして見る。驚く。

ボンネットの下に、エンジンがない。

当たり前だ。あのボンネットの低さでは、どんなエンジンだつて入りようが

ない。それも、わかつてたことだったが、初めて見た。

これがミッドシップ。

エンジンが、ボディの真ん中、ドライバーズシートの前、後ろにあった。

エンジンというクルマの中で一番重いものを、真ん中に置く。そうすれば、真ん中の重いコマと同じ、回りやすくなる。機敏な運動性を手に入れることができる。だが、人も荷物も、載らない。レース専用車、ならではの贅沢な設計。もちろん、ドラグーンは普通のクルマである。前にエンジンを置き、後輪を駆動した。

「ミッドシップだあ……」

「は、初めて見る……」

「ア、アホ、こんなもんナカジマのチビトラックと一緒にやっちゅーねん。お、おそるるに足らずや！」

「あ、イナ、あれは違うよ、あれはリア・エンジンだよ。後輪の後ろに、エンジンがあるんだよ」

「ふえ？ そ、そうなんか？」

「あ！ ザイゼン君だ……」

君、をつけていいほど、天才・ザイゼンは若かった。ナイトのメカニック達と同世代。だが大金持ちの御曹司としてドライビングの英才教育を受け、レース歴も長く、もちろん、技術も素晴らしかった。その上、美男子。ボディの黒と抜群のコントラストを描く、真紅のレーシングスーツが、とんでもなくカッコイイ。そしてボディには、誇らしげに前回覇者の称号であるカーナンバー、1。

非の打ち所など、ない。

まるでこのドライバーとこのクルマだけは、別世界だ。

雑誌の中で見るような、外国の、グランプリだ。

「ど、どうしようイナー……な、なんかあそこだけ世界が違うよう……」

「ア、アホか、俺らにできることなんかもうないっちゅーねん！ あとはシンジの頑張りと俺らのドラグーンの頑張りに、全てを託すしかないやろう!？」

「で、でもシンジはレース、初めてだし……」

「大丈夫、大丈夫や。」

アイツは世界一、ドラグーンを知ってる男や。

アイツは世界一、ドラグーンに乗ってる男や。

このサーキットかて、何百周したかわからへん。大丈夫や。シンジやったら、きつとなんとかしてくれる……」

「ううう、シンジ」

「イナ！ もつちー！ そろそろ予選が始まるぜ！」

「おう！」「うん！」……

予選の結果は、哀しいほどに、予想通りだった。

トップはザイゼンレーシングのGCワイバーン、もちろん二位に、ナイト・ワークスのドラグーンが続く。

その差、3秒。

一周1分20秒程度のこのミカサ・スピードウェイで、3秒というのはどうしようもないラップタイム差である。ドライバーの腕がどうのこうのというレベルの話では、ない。

だがこれを人々は予想外の健闘と讃えた。

なぜならドラグーンのドライバーは、このレースがデビューとなるルーキーだったからである。

ガモウ監督は、奇策をとった。

国内の有力ドライバーで、フリーのドライバーはみな、首を縦に振ってはくれなかった。誰だって、負けるとわかつてる勝負には、立ち向かいたくはない。それならば、身内から捜すまでだ。

クルマ屋には、クルマで走るのが三度のメシよりも好きだ、という連中がゴロゴロ居る。そんな連中の中から、一番速いやつを使おう……またそれでなんとかなるような、牧歌的な時代でも、あった。

ドライバーは予想に反して、すぐ見つかる。社内公募をかけるやいなや、あらゆるところから、一人の若者の名前が、上がったのである。

「それなら、シンジだ」

「ウチで一番速いのは、シンジだよ」

若者は、テストドライバーだった。



天の配剤、しかも、市販車ドラグーンを、量産試作車段階から乗り続けた。

ドラグーンのことなら、ネジ一本まで知っている。

ドラグーンになら、何千時間乗ったか、わからない。

ガモウは藁にもすがる思いで、彼に逢う。テストコースで、市販車のドラグーンを走らせる彼に、逢いに行く。

瞬間、悟った。

彼しか、いない。

彼の駆るドラグーンは、ガモウの知っているドラグーンではなかった。惚れ惚れするような美しい曲線をコースに描き出す。排気音ですら、まるで音楽のように聞こえる。

そしてもちろん、見たこともないほど、速かった。

まるで路面を滑るように、タイヤが地に着いていないかのようになめらかに、

風のように、走った。

ガモウはテストを終えて引き上げてきた彼に飛びつくように迫った。

次の『グラン・プリ』で、ドラグーンに乗って欲しいと。

これにはナイトの、いやこの国のクルマ達の希望が、未来がかかっているのだ、と。

優しい目をした若者は、

「わかりました」

と一言だけ、応えた。

――

「3秒か……苦しいなあ……一周でそんなに差がつかなら、レース・デイスタン

スではちようど一周差だぜ。ラップされないことを祈るしか、ないのか……」

頭を掻きながら、コウジがつぶやいた。声に出してつぶやかなくとも、そこにいるみんなが、同じ気持ちだったに違いない。たった一人を、除いては。

その一人は、未だ流れ出る汗を拭おうともせず、各車の予選ラップタイム一覧を、食い入るように見つめていた。ガモウが、声をかける。

「お疲れ、シンジ。19秒台に入るとは思いもよらなかつた。さすがだぜ」

「いえ……」

「ま、ポールポジションはいい。放っておけ。トミタや実産のクルマに、2秒以上の差をつけてちぎってる。この調子で行けば二位は」

「いえ、放つては置きません。これなら、勝負になります」

周囲から驚きの声上がる。あのおとなしく、物静かなシンジが、そんな虚勢を張つたことに。

「おいおい、無理しなくていい、シンジ。ここで3秒差つてのがどれほどの大差

かつてのは、俺が一番よく知ってる。第一……」

「3秒では、ないです」

「なに？」

強い瞳。ということとは、虚勢ではない。何らかの理由がある。

「見て下さい。ワイバーンの1分16秒789は、一つだけ飛び抜けてます。次は、1分17秒311。その次は、1分17秒355。その次は17秒890。僕の最速タイムは、1分19秒800です。これなら、2秒差」

「あっ……」

慌てて数字が羅列されている紙をのぞき込む、メカニック達。

「む……」

監督も改めて数字を追う。確かに、16秒789は、一つだけ飛び抜けている。

「これはおそらく、まぐれとまではいいませんが、全てがうまく行きすぎた、パ

1フエクトラップです。本来の実力は全開でも17秒33あたり、もちろんそれよりも遅い周回もあります」

「本当だ……」

天才肌のドライバーによくある、ムラのある走りだった。一発はある。だがそれは並べられない。ガモウ、改めて去年の様を思い出す。そう言えば、去年も予選で、苦勞した。

それに比べてシンジのラップは、明らかに他車にひっかかった周回を除いて、19秒8〜9の間に、ぴたり、と収まる。正確無比、さすがは、テストドライバー1。

ならば、2.5秒から2秒ほどの差しか、ない。だがそれでも、大差。

「だが……」

「2秒なら、ホームとバック、両ストレートの最高速度でしか、差がついてないことになります。それならば、ついていける」

「あ！ そうか！ スリップストリーム！ レースなら！」

「うん」

モトヤマが上げた声に応えるシンジ。前車の後ろにぴたりとつき、それを盾に空気抵抗を減らし、直線で実力以上のスピードを出す、スリップストリーム。

「なるほど……だがしかし」

「もちろん、タイトロープであることには変わりないです。ラインを変えられたい、こちらが少しでもミスをすれば、スリップを外される。そうなれば、もう捕まえることはできない。独走を許します」

「うむ、そうだな。だがもしそれがうまく行き、ずっと食らいつくことが出きるなら……」

「相手のほんの小さなミスについて、前に出ることが、できるかもしれません。前に出られれば、抑えきることも、できるかもしれません」

「……そうか……」

皆の顔に、光が射してくる。

監督は、下唇を噛みしめて、悔やむ。そして。

「スマン、シンジ！」

驚くスタッフ。

「俺がバカだった。ホントなら、こんな事実を発見して、お前やみんなを鼓舞するのが、いやそれだけが俺の仕事なのに……最初っから諦めの気分が入るなど……監督として失格だな！」

「いえ、そんな」

頭を下げる。皆は予想もしていない監督の行動に、息を潜めて成り行きを見守るばかり。だが顔を上げるや。

「だからこれからは俺も一メカニックのつもりで戦う！ シンジ、クルマのことなら何でも言ってくれ！」

「監督……」

「そうやッ！ シンジ！ 勝負や！ 勝負はやつてみやなわからへん！ なんや！ なんか必要なもんがあつたらゆうてくれ！」

監督の真摯な姿勢に突き動かされて、外装担当のイナが叫ぶ。

「シンジ、エンジンのチューンは任せとけ。この天候は読みにくい。あんなポツと出のクルマにセッティングなんか出されてたまるか。GP20最高のパフォーマンスを見せてやる！」

エンジン担当の芸術家肌のチューナー、シユンがいつにない大声を出す。

「タイヤもそうだ！ あつちのタイヤは凄いタイヤみたいだけど、あんなグリッ  
プでレースディスプレイスタンス持つはずがない！ 俺達が死ぬほど走り込んで特性を出したスペシャルタイヤが、トータルで負けるはずがない！」

タイヤ担当のコウジが吼える。

「え、あ、う……」

「ほら！ もつちー！」



「ぼ、僕は……僕は……シンジ！ 頑張つて！」

あつはつはつはつはつは……

極端な緊張から、素つ頓狂な声を上げるモトヤマの様子に、空気がほぐれる。後には決意と、いいゆとりが、戻ってくる。

レースは、始まっている。

逃げていても、何も始まらない。

結果は、神のみぞ知る、である。そんなものをいくら考えても、無駄だ。やるしか、ない。

「あははは、みんな、ありがとう……クルマのことは、お願いするよ！」

「おう！」 「よっしゃー！」 「OK！」 「まかせとけ！」 「うんっ！」

「じゃあ、早速もっちゃんにお願いがあるんだ」

「え!? ぼ、僕に!? サ、サスセツティングに、何かマズイところ、あつた

!?  
」

シャシー担当のモトヤマが色をなす。だがシンジは落ち着いた声で続けた。

「いや、違う。あのセッティングはスピードを出すのには完璧だったよ。あれ以上は無理だと思う。だけど少し、乗り難いんだ」

「う、うん……ちよつと、ピーキーかな」

「うん、アンダーからオーバーへ移行するときの変化が急激だね。そこをうまく利用すると抜群に速いんだけど……もう少しそこを、マイルドにしてほしいんだ」

「わ、わかった、でも、そこをいじると……」

「遅くなる、つてのは無しだよ。そんなことじゃ、天才モトヤマの名が廃る」

「頼むぜもつちー！」 「簡単だよな」 「さすがモトヤマ！」 「ヨッ！ サスの神様！」

「あ、ああうああう……が、頑張る……」

皆に肩や頭をバンバン叩かれて、小さく声を出す。だが皆も安心する。頼りないように見えて、一度言ったことを必ず実行することにかけては、モトヤマの右に出るものはいない。なにがなんでも、シンジ好みのセッティングを出してくるだろう。

「あとはイナ！」

「おう！ なんや！」

「ドラグーン的車検結果を見ると、最低規定重量より5キロ重かった。クルマのコーナーでのスピードは、パワーには関係ない。車重で決まるんだ。ワイバーンは生粋のレーシングカー、最低重量ぴったりだと思う。この5キロ、なんとかならないか」

「ううむ……それは……」

ここに至るまで、部品一つ一つを舐めるようにチェックして、削ってきた。

もはやどこにも、贅肉はない。それはもちろん、シンジにもわかつてる。天を仰

いで考える。思いつく。

「せや！ 忘れてた！ 目玉や！ 雨で走るハメになつたら思て残してたんや！ この天候ならあれは要らん！ よし、配線まで入れたら4キロ近う減らせるぞ！ ……あと1キロ……あ！」

ふと、思いついたらしい。やにわに自分のツール・ボックスを漁りだして取り出したのは、サンダー（研磨機）。

訊ねる間もあらばこそ、電源の入れられたそれは甲高い音を立てながら回転する。何の躊躇もなく、ボディにそれを当てる、イナ。

「な、イナ！ 何を！」

「塗装を落とすんや！ 薄膜言うてもクルマ一台分言うたら何百グラムにはなるで！」

そのボディに描かれた丁寧なトリコロールは、イナが心血を注いで仕上げた作品だった。「この赤はフラーリでつこてる赤やで」「この青はホードから分け

てもろた」自慢げにそんなことを言っていたのを、思い出す。それを、削つて、落としていく。

ボデイの、鉄の、銀に輝く地金が、見えてきた。

サンダーの甲高い回転音、イナの真剣な表情、剥きだしになっていく鉄の色、そして塗膜の剥がされていく大きな擦過音は、生まれ変わろうとするドラグーン  
の、悲痛な叫び。

皆の顔に、真剣味が戻ってくる。

瞳の光が、強くなる。

できることは、すべてやる。

絶対に、負けるものか。

「シンジ。後は任せて、お前は休息をとってくれ。今日は俺達が頑張る。明日は、お前に任せるしか、ないんだから」

シンジが背中を押し、パドックからシンジを追い出す。メカニックとして、

裸のクルマを見られるのは、嫌だった。いや、裸を見られるクルマが、可哀相だった。シンジもうなずく。

「頼んだ、よ」

「ああ、信じてろ」

イナのサンダーの音は、響き続ける。

---

予選前日、夜遅く。

シンジは、兼ねてから想いを寄せていた、一人の女性の元へと向かった。彼女の名は、アキ。工場の社員食堂で働く、地元の娘だった。意志剥きだしのようなキツイ目鼻立ちが印象的な、美人である。

だがその瞳の強さのとおり、猛烈に気が強かった。皆は言う。「アキちゃん

は美人だけど……ちよつとね」。しかし工場の、「働く男達」を向こうに回して食堂を切り盛りするには、これぐらいでなくてはならない。

芯から優しいシンジは、そんなアキの力強さに、惚れていた。そしてその強さの後ろに、優しい一面を持つてゐることも、知っていた。幾日も徹夜ぶつ続けで走る耐久テスト、いつも遅くまで残つてブツブツ言いながら夜食を作つてくれたのは、ほかならぬアキである。

「……なによ、シンちゃん、こんなところ呼び出したりして！ 明日は予選なんですよ？ こんなところでサボつてていいの!？」

一つ、年上だった。

「アキちゃん……これを……」

パドック・パス。チーム関係者しか入れない、ピット内に入ることのできる

通行証。

「? なにこれ?」

「これがあれば、どこでも入れるんだ。ウチのピットにも」

アキも、シンジには好意を持っていた。

どこまでも優しいその瞳その物腰と、テストコースを走るその姿に。ただ

黙々と、誰よりも多く、誰よりも速く。その姿は、誰よりも、カッコよかった。

「見に来てっていうの!?! フン、アタシは忙しいのよ! レースなんて、見にいけないッたら」

アキは、素直ではなかった。特に最近、虫の居所が悪い。ドライバーが発表されるや、取材陣がシンジに群がった。自分の側に居たシンジが、どこか遠いところへ、行ってしまったようだった。

「そう……もつちーやイナやシュンやコウジも、頑張ってるんだ、みんなのために、応援に来てくれないかな、と思ってる……」

「フ、フンだ、ウチの工場きつての悪ガキブラザーズじゃないの。アンタ達みた



いなナイトの恥さらし、わざわざミカサ・スピードウェイにまで見に行くなんてそんな酔狂なことできませんー」

イーッつて。でも、レースがどこで行われるかは、知っている。

「そう……でも、その方が、いいかな」

「？」

いかにも残念そうに目を伏せたシンジ。小さなズタ袋から、小さな箱を取り出す。

「じゃあついでに、これも、預かってくれないかな」

「何コレ？」

それは、宝石箱だった。

中を開けると、小さなダイヤの指輪が、入っている。

「ひえっ!? な、なななな、なになに、なによこれ、ひよ、ひよつとしてぶ、ぶぶぶ、ぶろぽーずとか言うんじゃないでしょうね! ダ、ダメよ、アタシの王

子様は銀の甲冑を身にまとい白馬に乗って……」

「母さんの形見なんだ。僕が一番、大切なもの」

オタクつくアキに、シンジは優しい声で、それだけ告げる。

「ふえ？ 何だ、そうじゃないの……エッ!? そ、そんな大切なものどうして

……」

「大切だから、アキちゃんに預かって貰いたいんだ」

「え……」

シンジの真剣な表情に、アキの動揺も収まる。

「テストコースと違って、レースは、何が起こるか、わからないから」

レーサーはよく、死んだ。

シンジはテストコース限界走行ですら、一度も事故を起こしたことなどな

った。クルマをいたわる愛情が、どこまで限界走行しても、事故には結びつかな

かった。クルマが、シンジを守っていた。

その彼が、そう言う。

死ぬかもしれない、と。

それほど厳しい、クルマと自分を追い込む、戦いだつた。

「シンジ……」

その瞳に全てを飲み込む。その指輪を預ける意図も。

そしてアキは、預ける相手に自分を選んでくれたことを、誇りに思う。

「わかつた、預かる。絶対に、なくさない」

「ありがとう。頼んだよ」

それだけ告げると、背を向けてまだ作業の終わらぬ、ドラグーンの待つ建屋へと歩いていく。

(バ、バカ、こんな時にはキスとかするもんじゃない……バカ……)

アキは、素直では、なかつた。

シンジは眠れぬ身を起こした。

いつもなら、どんなことの前でも睡眠だけはぐつすり取れる彼が、興奮で寝つけない。去来する様々な想いが、頭の中を一杯にして、臉は、一向に重くならない。午前、2時。

ふと、こんなことを想い出す。外国の、有名ドライバーのジnkスを。

「私はレース前日の夜中にこつそり、自分の愛車に会いに行きます。そして誰にも見られないように、キスをします。明日の勝利を、祈って」

それをやってみよう、と思つた。

わざわざそんなことをしなくても、クルマへの愛情は誰にも負けないシンジ

だったが、藁にもすがりたかった。そして実際、眠れなかった。

「おや？」

ずらり並ぶピットの一つだけに、あたりが点いている。人の声すら、する。まさか、泥棒やスパイではあるまいが……思いながらも警戒して近寄る。そう、ウチのピットだ。半身で、覗く。

「……あうう、こんなのでホントに効くの？ イナー」

「アホ！ ワックスでツルツルにしたらちよつとでも空気抵抗を減らせるんや！」

「ホントかな？」

「できることはなんでもやらなあかんやろ！ これでトップスピードが 10キ口上がつたら、めつけもんや！」



「がりだぜ」

「アホ、俺はなんもしてへんつちゅーねん。コイツの素顔が、美人なんやて」  
鉄の地金を露わにされたドラグーンはしかし、目を覆わんばかりの銀色に、  
光り輝いていた。薄暗い、白熱灯の元ですら。

「へへへ、明日は頼むでー」

「そうだな！」

「……勝敗はどうでもいい。GPとドラグーン、それにシンジが、全力を出せれ  
ば」

「無事完走、これが目標だね！」

「ああ！」 「おお！」 「そう！」 「せやな！」

シンジは、くだらないジnkクスに頼ろうとした自分自身に、恥じ入る。  
そんなことしなくても、何よりも頼れるクルマが、ここにある。

何よりも頼れる仲間が、ここにいる。  
黙って、踵を返す。部屋へと、急ぐ。

「アキちゃん！ こつちこつち！ 早く早く！ スタート！ スタート！」  
「う、うん！」

細長いピットの中を、モトヤマに導かれ走るアキ。レースを観に行くのなんて初めてで、何を着ていつていいかわからなかった。だから着た、一張羅の純白のワンピース。汗と油にまみれたつなぎの猛者達のなかで、浮きまくっている。でもそんなこと、気にしてはいられない。もうすぐ、始まる。シンジの、戦いが。



決勝のスターティンググリッドについて各車を見て、超満員芝生部分すら埋め尽くす二十万人の観客は、ため息をついた。

一台だけ、格の違うクルマがいる。

それはもちろん、黒い翼竜、ワイバーン。改めて並べて比べると、他との差は一目瞭然、だった。そして観客達は、それを駆るドライバーが、優勝カップを掲げる姿しか見たことのない、「天才」ザイゼンであるということも、知っている。ボンネットに、勝利を約束するがごとく描かれる、カーナンバー、1。だが。

通、クルマ好き達が注目したのは、その隣、フロントロー2番グリッドに佇む、ドラグーン。ヘッドライトを取り去り、ただの鉄板でフタをしてある。なにより、イメージカラーまでもを落とした煌めくような鉄地肌のシルバーは、最後の最後まで勝負を諦めていない、ギリギリの軽量化の証。ゼッケンは、0。それも、素顔のクルマ、ルキーードライバーに、よく似合っていた。

(ナイトなら、あの連中なら、何かやつてくれるかもしれない……)  
ほんの小さな、ほんの幽かな希望の光が、輝くボディに反射する。

オールクリアのグリーンフラッグ。

シグナルが赤から青へ。

レースが、始まった。

恐るべき加速力、他の全ての全開加速が止まっているようにしか見えないそれを  
見せつけて飛び出したのは、予想通り、ワイバーン。しかしドラグリーンも、  
いつものドラグリーンとは思えないほど爆発的なダッシュを見せ、ワイバーンに食  
らいつく。

1コーナーへ吸い込まれていく、二台。ホールショットは、ワイバーン。

「よし！ まずOKや！」

「うん！ これからだよ！」

無事にスタートを切り、作戦通り敵にピタリと、ついた。後は、シンジの技術にまかせるしか、ない。

そのレースは、まだ珍しいTVでも、生中継された。

国中のクルマ好きが、いや、クルマ好きでなくても娯楽に飢えていたこの国の人々が、かじりつくようにして見ていた。街頭に置かれたTVの前には、黒山の人だかりが、できていた。

人々はその、トップを走るクルマが、外国のクルマだということを、知っていた。そしてそれがどう見てもまるで別格の強さを持っていそうであることも、一目見て、わかった。

それでも。

固唾を呑んで見守った。拳を握って見守った。

ところどころから上がり始めた「頑張れ」という声援は、瞬く間に大きなうねりとなり、叫びとなつてその場の人々全てから放たれる。

黒いクルマにしがみつくように追いつがる、銀色の小さなクルマに向けて。

「頑張れ！　頑張れ！　頑張れドラグーン！　頑張れシンジッ！」

最初は予想通りの展開に、ため息ばかりのサーキットの観客の空気が、変わってきた。

まるで首根つこを押さええられて引きずり回されるように、最終コーナーを立ち上がってくる、一位ワイバーン、二位ドラグーン。黒と、銀。

何周も、何周も、その姿が続く。

ワイバーン、そしてザイゼンの余裕のおふぎけかと思われた。いずれちぎつて、手の届かない遙か彼方を一人旅……に、いつまでもいつまでも、ならないのである。

なによりラップタイムが物語る。ワイバーンは予選で出した16秒17秒台など一度も出ない。1分19秒前半をウロウロする。そして、ほぼ同じタイムで、ドラグーンがピタリ、と追走。この予選タイムすら上回る約1秒は、シンジの超絶技巧、そして仲間達の懸命の努力のたまものだった。

「違うぞ！ 遊ばれてるんじゃない！ 逆だ！ 追いつめられてるのは……ワイバーンだ！」

モトヤマの出したセッティングはパーフェクトだった。まるでサーキットが、田園風景の続くワインディングロードになった。鼻歌すら出そうになるぐらい、運転が楽だった。そして何より……楽しかった。シンジは、思う様その実力を発揮する。

シュンの読んだ、天候曇り、温度低め気圧低めを狙ったキャブレター・セッティングはどんぴしゃり、だった。もともと信頼性には定評のあるGP20、完

全バランス・直列6気筒ならでの、天井知らずの吹け上がりでシンジの右足に  
応える。

コウジの選んだタイヤも、決まっていた。最初は固めで、グリップが足りないかと思われたが、何周してもタレない。へたらない。しかもその、スリップ時の穏やかな特性変化は、シンジのタイヤの能力を100%引き出すドライビングに、ピッタリだった。

イナが喚きながらかけたワックスも、心なしか効いているようだった。いや何より、光り輝くボディは目立った。周回遅れがタップリと道を空けてくれる。もちろん、彼らは黒く見辛いワイバーンには、故意でないにせよ、冷たかった。

二十周目のサインボードを掲げようと準備していたモトヤマの後ろから、ガ

モウ監督が声をかける。

「モトヤマ、もう前との差やラップはいい。あいつなら、承知の上だ」

よ、と自らしゃがみ込んで、ラップタイムを示した数字の板を、外していく。

「ど、どうされるんですか？」

「ん？……シンジへの、メッセージだ」

組み替えていく数字に、モトヤマが笑顔になる。監督に、こんな洒落つ気が

あつたなんて。

「奥さん！ これを掲げてくださいませんか！」

「お、奥さん!? あ、あのあの、ア、アタシち、違います！」

ピットで食い入るようにレース模様を観戦していたアキが驚く。

「あれ？ シンジの奥さんじゃないんですか？ じゃ、なんです？」

遠慮会釈のないガモウの素朴な問いに、アキは頬を紅にして小さくつぶやく。

「……………恋人……………です……………」

微笑む若者、四人。

「ああ、ならなおいしいです。お願いできますか、重いですけど」

「は、ハイ！」

そしてピットロードを渡った先にある、コンクリートの低い壁の際まで行く。周りのピット、そして正面スタンド満員の観衆から、「何だありゃ」という視線とどよめきが起きる。

ピットに突然咲いた、白い花。

油臭い男達の中で、その姿は嫌でも目立つ。

しかし彼女はそんな周囲の目に少しもビビらず、食器運びで鍛えた腕で、誰よりも高く、サインボードを掲げ上げた。

サインを見て、観客、そして近くのピットのメカニック達までもが、沸いた。



ドラグーンのダツシユボードには、昨日までシフトノブに掛けられていたナルタガワ交通安全お守りが、寸分違わず彫刻されていた。シユンの、手業。そのお守りに見守られるかのように、シンジは、いい感触を楽しんでいた。

クルマは完璧だった。そして作戦も驚くほど上手く行っていた。相手は、明らかに焦りや疲れや、不安を抱えて走っている。それに比べて、自分はいかに恵まれているか。いかに楽しんでいるか。

笑みさえ、零れそうになる。

だがこの闘争心の無さは、シンジの悪い癖だった。

いつの間にか、相手へのプレッシャーを忘れていた。そう、この作戦は、くつついていくところまで。そこから先は、相手のミスを待つしかない。しかも相手は、不調とはいえ天才・サイゼンだ。ありとあらゆるプレッシャーを後ろからかけ続けてミスを誘発しなければ、勝ち目は、ない。

そんなシンジの、ケツを叩いたのは。

二十周目ホームストレート。ピットロードに掲げられた、いつもと違う、おかしいサインボード。

たった、これだけ。

「5 5 5」

シンジは一瞬、理解に苦しむ。何かの暗号、作戦を示すコードネーム、あるいはピットへ入れというサイン……そんなもの、決めてたっけ？

だがそれは一瞬だった。視界の違和感。いつもと、違う。

そう、サインボードを掲げるのは、もっちーではなく……

(……アキちゃん！)

その顔は、不安と、祈りと、そして叱咤激励に、満ちていた。

(バカッ！ もつと頑張りなさいよッ!!)

その瞬間、シンジはそのサインを理解し、その命令を了解する。

右足を、もう全開のアクセル・ペダルを、更にきつく、厳しく踏みつける。  
床が、抜けんばかりに。

(GO！ GO!! GOーッ!!!)

女神に捧げるものは、勝利、しかない。

ザイゼンは苦悩する。

セッティングが出てない。付け焼き刃は所詮、付け焼き刃。一から身につけ、

血となり肉となっていないから、応用が利かない。天候が変わり温度が変わり長い距離を走らなければならぬのに、エンジンも、サスも、タイヤも、昨日ほどのパフォーマンスを、出してくれない。

買ってきた技術など、技術では、なかった。

それに周回遅れが道を譲らない。まるで勝利のために外国のクルマを選んだ自分に、抗議するかのよう。それは単なる被害妄想だったが、順風満帆、晴れの日しか知らぬザイゼンには、あまりにも堪える現実だった。

なにより。

敵が、速い。

特に二十周を超えた辺りから急に、アタックが執拗に、激しくなっていた。ここまで追いつめられたのは、レース人生で初めてである。

テストドライバーあがりなど、毎レース死と隣り合わせで戦っている自分の敵ではないだろう、と思っていた。

それは、完全な間違いだった。シンジは、毎日毎日、拳動の定まらない赤ん坊のようなクルマ、パーツの信頼性無くいつどこでブレーキやステアリングが吹き飛ぶかもしれない試作車、そして今日はトラック明日はスポーツカー……そんなクルマ達を相手に、ラフで路面の悪い、砂利や水やオイルの浮くテストコースを、命を賭けて走っていたのである。

走ってる時間の長さなら、レーシング・ドライバーなど問題にしなかった。まして、今、今乗っているクルマと、共に過ごした、共に走った、時間なら。

自由自在に、まるでクルマと人とが、一つの生命体となっている。

人馬一体、野を駆ける。

まるで言葉の壁があるかのごとく、言うことを聞かないクルマ。そのクルマに、苛立つ自分。こんな関係では、ない。そして自分でも驚く。

その一人と一台は……羨ましかった。

バックミラーで見るそのドライビングも、初めて見るスタイルだった。

大げさなドリフトを多用し、派手な挙動変化で右に左にクルマを振り回す。

ドリフトはグリップより遅い、という教科書を信じるザイゼンにとって、どの道滑るのなら、逆に滑らせてそれをコントロールしよう、というシンジの走りは、まるで魔法だった。

「コイツ、俺より、速い」

急速に胸の内に膨らんでくるその疑念。負けたことなど一度もなかったザイゼンが、認めたくない事実。こちらは世界最高のレーシングカー、我が国随一のプロフェッショナル・メカニック。あちらは市販改造車、若いサラリーマン・エ

ンジニア達。なのに相手は、こちらにピッタリ、ついてくる。

エリート・ザイゼンは知らない。

大切なのは、想いの強さ、だけであることを。

それが誰であるかとか、それが何であるか、などということには、一片の価値もないことを。

様々なマイナスの感情が、彼のドライビングを不安定にしていた。

それでもトップを走れるのは、天才的センスの賜である。

だが、それはギリギリのバランスだった。

ほんの少しの小さな要素で、崩れるほどの。

「マズイッ！」

バックストレート三分の二を過ぎたところで、コーナー入口付近にヨタヨタ

と向かう、周回遅れを発見する。この調子では、ちょうどコーナーへの飛び込みで重なる。先ほどから周回遅れには煮え湯を飲まされっぱなしだ。どうせコイツも、見ていない。

アウトから被せて、強引に抜きに行く。

それは、ミスだった。

黙って後ろについて、のんびりホームストレート出口でのフル加速を、待てばよかったのである。一瞬でも隙を見せれば、後ろにやられる。その緊張感が、不要な焦りを、生んだ。

ワイバーンがまさにラインを変え、アウトに飛び出したその瞬間、その周回遅れはよろよろとアウトへと流れてきた。

道を、譲ろうとしたのである。

「しまっ!!」

更に大きくアウトへ逃げて、数センチで接触を回避する。だがそのラインか



らでは、コーナーを曲がりきれない。機敏な動きを約束するミッドシップが、その過敏なスピンの特性の牙を剥く。

「クッ!!」

フルカウンターとアクセルの芸術的コントロールで、故意にハーフスピンに持ち込む。飛び出して砂利に掴まれば、お終いである。ワイバーンは、ほんの少し、翼を休めた。

その横を駆け抜ける、銀色の、小さなクルマ。

ゼッケン、0。

遠くから地響きのような大音響が聞こえてくる。

最終コーナーの先に設けられた仮設スタンドからだ。

正面メインスタンドの観客達は、何事ぞと立ち上がる。  
そして見る、奇跡のような、瞬間を。

最終コーナーを立ち上がる二台のクルマは、最初に銀、そして、黒。  
トップは、先頭は、我らが、  
ドラグリーン。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおお……」

興奮した観客達にできることは、雄叫びを上げることか、スタンドを壊さん  
ばかりに手足を打ち鳴らす、ことだけだった。

『ドラグリーンだッ！ ドラグリーンだッ！ ドラグリーンだッ！ ドラグリーンだあ  
あああああッ！』

サーキットアナウンスの上擦った連呼さえ、観客の怒号にかき消されていく。

銀の甲冑をまとった竜騎兵は、退治した黒い翼竜を引き従えて、

ホームストレートを突き進む。

どんな英雄の凱旋よりも、雄々しく、優雅で、美しかった。

国中のTVの前ラジオの前で、絶叫が起こった。

街頭で、家庭で。

手を叩いて悦ぶ人々。老いにも若きにも、男にも女にも満面の笑み。クルマ

のことなど知らなくても、レースのことなど知らなくても、今ここで起きた事実  
は、すぐにわかった。

あんなに凄い外国のクルマに、僕たちのクルマが、勝った。

その、事実である。

そしてその事実は、見るものに勇気と、熱い気持ちを、熱い涙とともに、奮い立たせた。

「おとうさん！ あの銀色のクルマは何!？」

「……ああ、あれは、『ドラグーン』っていうんだ。俺達の、世界一の、スポーツカーだよ!!」

俺たちは、やれば、できる。

頑張れば、できないことなど、ない。

その瞬間を、同じサインボードを握りしめたままピットレーンに立っていたアキは、メカニック達の怒号のような雄叫びをバックに、見つめていた。

まさか、本当に、銀の甲冑を身にまとった王子様が、竜退治を終えて自分の元へと駆けつけてくれるなんて。

ただぼんやりと見つめ続けるしかなかったアキの肩や腕が、乱暴にバンバンと叩かれる。いつもの、悪ガキ達だった。どの顔も、笑いと涙で、くしゃくしゃだった。監督までが、髭面と深い皺をぐしゃぐしゃに濡らして、号泣していた。だけではない。

周りのピット……トミタや実産のメカニック達でさえ、自分たちのクルマ、自分たちのレースそっちのけで、ガッツポーズを作り雄叫びを上げ、手を叩いていた。帽子を叩きつけ、握った拳を突き上げ、そして……笑っていた。泣いて、いた。

その輪の中心に、自分が居た。

(シンジ……シンジ……か、帰ってきたら……帰ってきたら結婚してやるんだからッ！)

アキは、素直になった。

奇跡は、長くは続かない。

そういうもいつも起きては、奇跡とはいわぬ。

次の周回は死にもぐるいのブロックでなんとか抑えきったシンジだったが、その次のバックストレートエンド、ワイバーンに軽やかに抜き去られていった。

抜かれた、負けたことが逆にザイゼンの闘志を蘇らせ、そのテクニックが蘇った。その後は一度たりとて、トップを譲ることはなかった。そのまま、チエツカー。

だが結果なんか、どうでもよかった。

誰が一位で誰が二位、そんなことは、どうでもよかった。

誰が何といおうと、我らがドラグーンは、トップを走つたのである。

世界一速いクルマより速く。

すなわち、世界一、速く。

その事実とその感動は、詰めかけた二十万の観衆……いや、TVの前ラジオの前でこの戦いを見た者聞いた者何千万の人の心に、深く深く、刻み込まれた。

いつまでも追いつけないと思つていた相手が、追いつける、いや追い越せる相手だとわかつたこと。

劣つていると思つていた自分たちが、そんなに捨てたものでも、なかつたこと。

表彰式、メダルとトロフィーの授与、そしてファンファーレが鳴った瞬間、ザイゼン是一位の台にシンジを引き上げる。そして三位、トミタのモトと共に、シンジの両脇に立ち、両手を取って、高く高く、掲げ上げた。

君が、一番である、と。

満員の観衆は、そんな男らしいザイゼンと、そしてもちろん、二度と無いような奇跡を起こしたシンジに、心からのエールを、万雷の拍手を贈りつづけた。いつまでも、止むことはなかった。

いつまでも。

それから、長い、長い年月が、過ぎた。



ドラゴンとワイバーンの死闘は伝説となり、若者達はこのクルマを手にすることに憧れた。だが、急激な時の流れは、そんな小さな夢さえも打ち砕く。

合併。

手っ取り早く国内の自動車産業を育て上げたい、政府の意向だった。自動車産業は装置産業だ。スケール・メリットがモノを言う。業界第二位の実産と第五位のナイトが合併すれば、文句無く国内一位の巨大企業が誕生する。両者のメイソン・バンクが同じ事や、技術を大切にする社風が似るも手伝って、それは突然発表され、迅速に実行された。

市販車『ドラゴン』はその後、急速に発展する技術についていく形で、モデルチェンジされた。

期待されたそのクルマはしかし、「裏切り者」「面汚し」とまで酷評される。

モノ自体は、悪くなかった。広く、大きく、豪華で、壊れない、そして、安い。人々の現実的な所有欲を掻きたてるクルマだった。

問題はたった一つ。

それが、実産の従来からのブランド、『ブラックバード』の兄弟車……エンブレムを替えただけの……だったことである。

『ドラグーン』は、特別なクルマでなければならなかった。

誰もが乗っている、また誰もが乗れるクルマでは、ダメだった。

経済成長に乗って一山当たった、下品な小物が乗り回す、マイカー自家用車と同じクルマなど、『ドラグーン』では、なかった。

まして、永遠のライバル・ワイバーンのイメージカラーである、『ブラックバード』と同じクルマ、など。

その後も二代、同じ戦略を取った、取らされた『ドラグーン』は、それで打ち止めとなる。吸収された企業の、哀しさ。

そして時の流れは早かった。

クルマは、より大きく、より速く、より豪華に。

人々は、小さなスポーツ・セダンの存在を、忘れていく。

いつしか、第二回『グラン・プリ』の記憶すら、人々の中から、消えていった。

---

「親父、ちよつと見てもらいたいものが、あるんだけど。いいかな」

「ああ、どうしたんだい？ あらたまつて」

「いや、お袋との結婚四十周年、だろ？　いつまでもポンコツバンに乗せるのも息子としてはカッコ悪いかな、と思つてさ」

「また買い換えろつていうのかい？　だがアレにはお前達との想い出が……」

「またそんなことを言う！　オレ達だつてもう三十過ぎだぜ？　いつまでも恥ずかしいじゃないか。物持ちがいいのは結構だけどさ……ま、買い換えじゃないんだ。アレはここへおいといてくれれば、ウチの家族も借りに来るよ。そうじゃない、もう一台、どうだい？」

「もう一台つて言われても、なあ……」

その後、その国のモーターゼーションは、極めて順調に発展した。

自信を取り戻したこの国の人々の、元来からの手先の器用さや、繊細さ、執

着心。モノづくりに向いた性質が、自動車という舞台に花開く。

スペックがよく、作りが素晴らしく丁寧で、信頼性がバカに高く、そしてなにより、安い。

工業製品としての高い完成度を誇るこの国のクルマ達は、先達を吹き飛ばすようにして世界中に溢れていった。いつしかこの国は、世界第二位の自動車大国へのし上がる。

実産は国内二位へと地位を落としたが、世界的大企業としてこの世の春を謳歌する。

この間、いろいろあつた。

石油がなくなると言われた。このときは低燃費車、小さなクルマが、売れた。

異常なほどの好景気が続いたこともある。このときは、とにかく高級車、高額車、きらびやかなスポーツカーが売れた。

その後は、ファミリー層にRVと言われる、人や荷物がたくさん載るクルマがもてはやされた。

クルマは、その時その時で形を変えながら、人々に愛されていた。

だがそんな中、実産の経営は好景気の崩壊後、急速に悪化する。

技術中心で顧客を省みなかった、高コスト体質が改まらなかった、系列や銀行とのもたれあいが出らなかつた、社内でのくだらない権力闘争が……だがどれも、後付の理由である。

確かな理由は、たった一つ。

人々が、欲しいと思うクルマを、作れなくなったのである。

しかしこの国の人々は、ピンチに立つほど、素晴らしい力を発揮する。

そう、戦争に負けたあの日から、立ち直ったように。

そう、どうしようもなく強い敵に諦めずに立ち向かっていった、あの日のように。

引責の形で、それまで好き放題やってきた愚鈍な役員達が辞任した後、技術畑、エンジニア出身の社長が誕生した。「敗戦処理だ」などという揶揄の声も聞かれる中、彼は一ミリも諦めてはいなかった。

号令一下、社運を賭けたプロジェクトが始まる。

「コンパクト・スポーツ・セダンを作れ」

まるで売れ筋ではない、忘れ去られたジャンルのクルマを。

社の内外から「無謀だ」という批判が飛んだ。「お得意の特攻精神では、自滅の道を歩むだけである」と、諸外国から笑われた。だが、彼にはハッキリとした勝算があった。

大きく重い高級車や、箱形で背が高く運動能力に劣るRVや、小型であって

も実用性や省燃費ばかりを重んじたゲタぐるま……ユーザーは、いやクルマ好き達は、そんなクルマ達に飽き飽きしている。

走って楽しいクルマを、欲しがっている。

このクルマは、必ず、売れる。

……

「いや、確かにアレはもうヨロヨロで、走らせても可哀相な気がするぐらいなんだが……」

「だろお!? 走行五十万キロなんて、たぶんあの車種の最長不倒だぜ。そもそも親父がなんでスポーツ系のクルマに乗らないのかがわかんないんだよな。中学の時とか、友達が家に来てクルマ見ると『お前の親父は本物か?』って聞かれたもんだよ」



「まあ、な。仕事で、乗つてると、家では、ああいうバンが、いいんだよ」  
嘘を、つく。が、もういい大人になつてゐる娘には、通じない。

「ふふふ、お父さん、嘘つき。お父さんは、あのクルマ以外に乗りたくないんだよねえ。ほんと、いくつになつても、純情一途なんだから」

「ま、もういいだろ？ 親父。もうその仕事も引退したんだし、それになにより、あのクルマが」

-----

乾坤一擲の大勝負、全ての経営資源を投入した新型車は、「この会社にこれほどの活力が残つていたのか」と思わせるほど猛烈な勢いで開発が進んだ。余計な重石が取れたこともある。泣いても笑つても、これが最後の一台だ、という緊張感もあった。だがなにより、久しぶりに創り手が、ワクワクしながら、楽しんで

で創った、クルマだったのである。

そう、人のこころを動かせるのは、人のこころしか、ない。

そのクルマは、人々の予想よりはるかに早く、その姿を現した。

そしてそのクルマは、人々の予想よりもはるかに、魅力的だった。

小さかった。だがキャビンは必要充分、いや、広いクルマなど家にもう一台、ある。

贅沢な装備など、なかった。だがそんなもの、もうたくさんだった。雨滴を感知して全自動で動くワイパーに、何の意味があるというのだ。

少しばかり、高価だった。だが金なら、ある。それが言えるほど、この国は豊かになっていた。

そして小さく、無駄が無く軽く、たつぷりとお金をかけて造られたエンジン

とボデイは、なによりもクルマの根元的な魅力、最高の魅力に満ちあふれていた。  
「走る楽しさ」である。

発表と同時に問い合わせが殺到した。どころか、まだモノも見ないウチから、ディーラーに注文が殺到した。大量のバックオーダーを抱え、休眠していた各地の工場の生産ラインが、目を覚ます。海外のディーラーやユーザーからも、いつウチの国に持つてくるんだ、という絶叫が聞こえてきた。

もう、クルマに国境などなかった。

世界中から「クルマを寄こせ」の大合唱に、息を吹き返す実産。

モトヤマ社長は、賭けに勝った。

奇跡はいつも、このクルマと共に訪れる。

その名は、言わずもがな。

『ドラグーン』。

竜騎兵の伝説はまだ、終わっていない。

「『ドラグーン』が、帰ってきたんだからさ」

その言葉に、思わず反応してしまう。

「あつ！ ……あー……いやあまあ、それは……」

「ほらほら、素直になりなさいよ、お父さん！ 実はね、『ドラグーン』復活を聞いて、私達兄妹でお父さんにプレゼントしようかな、って」

「ええッ!? バ、バカ言っちゃいかん、あれは高いクルマだぞ、お前達だつてこれから子供達も大きくなつて……」

「ところが、さ。何でも言ってみるもんだねえ！ そんな話をダメ元で実産の広報室に持ちかけてみたんだよ、そしたらこれがうまい具合に社内を駆け上がったよ」

「お、お前達なんて厚かましいことを……」

「いいじゃない、きつとあつちにしたつて、いずれパブリシティで使うつもりだつて。お父さんとドラグーンの組み合わせつて、復活のシンボルとしてはこれ以上ない存在だと思うし！ そのうちCMとか、出なきやいけないかもよ」

「う、うーん……」

「で、取締役とかなんかその辺りまで行つちやつたみたいでさ、なんてつたけな、ああそうそう、モトヤマ取締役。知ってる？」

「あ、ああ……」

（もつちー……）

胸の内に、あの時あのガレージの光景が、蘇ってくる。

あの時の、みんなのあの笑顔が、蘇ってくる。

「それで何とタダで貰っちゃったよ。ドラグリーン、トップモデルを一台」

「ほ、ほんとか!？」

「ほらほら、ホントは欲しいんだ！ お父さんホント素直じゃないね！」

「そうだぜ。家中ドラグリーンの特集ムックや雑誌で一杯じゃないか。トイレの中にまで『ドラグーンのすべて』なんて本があるのにさ」

チラ、と妻の方を見る。

「お母さんだつて、実は反対じゃないのよね」

「……お父さんがまた、あのクルマに乗ると、年甲斐もなく、飛ばしそうですもの。

でも、切なそうにカタログを見る姿は、もう懲り懲りです。だから仕方なく

済ました顔で、ティーカップを下ろす。

途端に崩れる表情。これ以上ないほど、嬉しそう。

まるで、五つの少年。

初めて、クルマに乗った、あの時の、よう。

「あはは、お父さん、すっごいいい笑顔！」

「親父い、相変わらずお袋に弱いなあ！ オレが嫁さんに頭あがんないのは、親父の遺伝だぜ!? どーしてくれんだよ」

「そ、それより、い、いつ納車されるんだ!? あ、あれは今年待ちとか…

…」

息子娘の感想そっちのけで、おろおろと訊ねる。

「えへへ、実はもう、納車されてるんだよー」

「ああ。向こうもその気だったんだよ。なんだってシャシーナンバー一番だぜ

!?! さっき家の前に回してきた。見に行く?」

「ああ!」

返事の前から、そわそわと落ち着き無く立ち上がっている。父のこんな可愛い様子は初めて見る子供達が導く。済ました顔で母親が続く、玄関前。

「じゃじゃーん」

「ああ……」

言葉は、無かった。

小さな直列6気筒を胸に抱くFR、コンパクト・スポーツ・セダン。

低く、短く、小さく構えたその姿。デイテールこそまるで別物だったが、そ

のたたずまいには、確かにあの日の、面影が。

「小さいスポーツセダン、つてやっぱカツコイイよなあ……オレもチビの手が離れたらこういうの、買おうかな」

「うん！ そうだね！ 私はお父さんのこのクルマ、貰うわ！」

「アホかお前、親父がこのクルマを手放すかよ。棺桶にまで入れてどこまでも乗



つて……いや、コイツを棺桶にするに決まってるさ。……見ろよ、あの嬉しそうな顔」

「ほんと、大正解だったね、お母さん」

「……あなただったら……まるで初恋の人に逢ったみたい……」

「あはははは、お母さんのやきもちヤキは相変わらずだね！」

「でも久しぶりに見た気がするなあ……親父！ ほら、キー！」

投げ渡す。

そのキーには、小さなアルミプレートのキーホルダー。

『SHINJI 0』

誇らしく、彫られている。どうせ、もっちーの仕業だ。

握りしめる。

「アキ！ 走りに行こう！」

「はいはい。そう言うと思って、お財布も持ってきましたよ……シンジ」



「うん」

二人の見送る先は、グランプリドライバーと、その恋人。

そしてグランプリカー、『ドラグーン』。

ナンバープレートは「・5555」。

色はもちろん、光り輝く、

シルバー・メタリック。

「ドラグーン」Fin.